

—文化財NEWS速報— 江戸時代の仏像発見!!



写真の仏像は、谷中七福神で有名な西日暮里二丁目の修性院(日蓮宗、身延山久遠寺末)で平成13年に新たに発見されたものです。布袋尊像を修復し、本殿の一角に移動するため改築をしようとしたところ発見されました。日蓮宗の本尊関係の一塔兩尊仏像(左の写真)、四菩薩立像、四天王像のほか二十番神坐像、三十番神版本などが一括でできました。

荒川ふるさと 文化館だより

荒川区教育委員会
荒川ふるさと文化館
荒川区南千住6-63-1
TEL 03(3807)9234
登録(13)0025-02号

は願文と多宝如来の文字及び寛文拾三
年相州鎌倉仏師 今井庄左衛門佐吉尚
子ノ五月吉日銘ができました。このこ
とから、向かって左の仏像は多宝如来で
鎌倉の仏師、今井庄左衛門によって寛文13
年(二六七三)に作られたことがわかります。
区内でも四番目に古い彫刻で、仏師の名前
が判明しているものの中では、区内で一番
目という古さになります。また、この今井
庄左衛門はほかにも妙興寺(千葉市)、日蓮
宗の祖師坐像の建立、厚福寺(市原市)、天
台宗の阿弥陀如来立像の修復などを手が
けています。また「今井」という姓の鎌倉仏
師は日蓮宗関係の仏像を多数建立しており
その関係からも興味深い資料といえます。

また、三十番神ですが『新編武藏風土記
稿』の修性院のところに三十番神堂 聖徳
太子及毘沙門の像をも安置す、毘沙門は傳
教大師の作と云ふと記され、江戸名所図会
でもお堂があつた様子がうかがえます。し
かし、お堂及び聖徳太子、毘沙門天の像は
現存せず、三十番神も見つからないままに、
記録上ののみの話となっていました。それが、
今回の発見となりました。それが、
三十番神信仰とは、日蓮宗で広く勧請さ
れ、国内の神々が1ヵ月間(30日間)順番に
仏教信者を守護するというものです。今回
発見された三十番神は30体そろつており、

宝如来があり、それを包むように、四菩薩
や四天王が配されます。この一塔兩尊仏は、
仏像本体の保存状態は良好ですが、中央の
題目塔と、仏像の光背が欠損しています。
釈迦と多宝は光背で区別することが多いの
ですが、光背が欠損しているため、この仏
像は見た目では区別することができませ
ん。しかし、向かって左の仏像の体内から
は願文と多宝如来の文字及び寛文拾三
年相州鎌倉仏師 今井庄左衛門佐吉尚
子ノ五月吉日銘ができました。このこ
とから、向かって左の仏像は多宝如来で
鎌倉の仏師、今井庄左衛門によって寛文13
年(二六七三)に作られたことがわかります。
区内でも四番目に古い彫刻で、仏師の名前
が判明しているものの中では、区内で一番
目という古さになります。また、この今井
庄左衛門はほかにも妙興寺(千葉市)、日蓮
宗の祖師坐像の建立、厚福寺(市原市)、天
台宗の阿弥陀如来立像の修復などを手が
けています。また「今井」という姓の鎌倉仏
師は日蓮宗関係の仏像を多数建立しており
その関係からも興味深い資料といえます。

また、三十番神ですが『新編武藏風土記
稿』の修性院のところに三十番神堂 聖徳

太子及毘沙門の像をも安置す、毘沙門は傳

教大師の作と云ふと記され、江戸名所図会

でもお堂があつた様子がうかがえます。し

かし、お堂及び聖徳太子、毘沙門天の像は

現存せず、三十番神も見つからないままに、

記録上ののみの話となっていました。それが、

今回の発見となりました。

三十番神信仰とは、日蓮宗で広く勧請さ

れ、国内の神々が1ヵ月間(30日間)順番に

仏教信者を守護するというものです。今回

発見された三十番神は30体そろつており、

お問い合わせください。

文化財リニアーアルのお知らせ

西日暮里二丁目の養福寺(真言宗豊山派)

にある養福寺仁王門(荒川区指定有形文化財・建造物)の塗装が塗り替えられました。以前の修理の塗装を一度剥がし、パテなどで補強し塗装を施しました。

また、修性院の木造布袋尊像(荒川区指定有形文化財)も傷みがあつたため、安置場所を本殿に移動しました。

文化財は、修理などの現状を変更する場合、届出が必要付けています。詳しいことは文化館まで



「荒川10中卒業生作品より」

一塔兩尊仏は三宝尊ともいい、通常中央に題目塔、向かって右に釈迦如来、左に多宝如来があり、それを包むように、四菩薩や四天王が配されます。この一塔兩尊仏は、仏像本体の保存状態は良好ですが、中央の題目塔と、仏像の光背が欠損しています。

釈迦と多宝は光背で区別することが多いの

ですが、光背が欠損しているため、この仏

像は見た目では区別することができませ

ん。しかし、向かって左の仏像の体内から

は願文と多宝如来の文字及び寛文拾三

年相州鎌倉仏師 今井庄左衛門佐吉尚

子ノ五月吉日銘ができました。このこ

とから、向かって左の仏像は多宝如来で

鎌倉の仏師、今井庄左衛門によって寛文13

年(二六七三)に作られたことがわかります。

しかし、向かって左の仏像の体内から

は願文と多宝如來の文字及び寛文拾三

年相州鎌倉仏師 今井庄左衛門佐吉尚

子ノ五月吉日銘ができました。このこ

とから、向かって左の仏像は多宝如來で

鎌倉の仏師、今井庄左衛門によって寛文13

地名のつぶやき

(3)町屋のないしょ話編
(場面)



『三河島町郷土史』所収
現町屋一丁目一本松グリーンスポット付近

町屋：唐突ですが、「町屋」という地名から何をイメージします？

某：やはり賑やかな町場ですかねえ。

町屋：それは、今の町屋のイメージでしよう。あの「地名のつぶやき」によく登場する『日本国語大辞典』さんも、身がどうもしつくりこないんですよね。

私の名が世の中にお見えするようになつたのは、江戸時代の初めころなんですが、実は一族のみに口伝で伝えられてきたことがあるんです。ここだけの話、ちょっとご披露させていただきます。

今から千百余年前、坂上田村麻呂が奥州攻めに出向く折、従つてきた野武士が千住製糸所（今の荒川工業高校）辺りに土着し一つの町屋をなした。八幡太郎義家が荒川を渡る時に、舟で渡したのはこの住人で、若宮八幡（南千住六丁目）は鎮守であった。この土着した野武士が、町屋の遠祖で、南北朝末ころ現在の地に移つた。この町屋からついた名前だ（昭和7年『三河島町郷土史』）というのです。そ

れでも、早くに町屋をなしたことが、由来となっていいます。ittai、私はご親戚の加藤雀庵さん、この方大変探究心の強いお方で、調べたことをいろいろと書き留めていらした。その一つ、『ちりづか』（四十四武藏鑑）に、昔この辺りでは、野を「や」と呼んだ、と記していらっしゃる。そうすると、町屋のやは、野の意味と考えられませんか。「まち」は「まつち（真土）」が音便化したもので、つまり「マツチヤマ」→「マッチャヤ→マチヤ」となつた、下町の人人が、台東区の真土山を「マッチャマ」と呼んでいるみたいに。

ところで、その真土ですが、これは粘り気がある土の呼称です。真土山だけでなく、荒川区にも真土（旧三河島町の小字）という地名があります。粘性の高い土といえば、荒川下流域で採れる荒木田土。壁土や焼物用の土として重宝されていました。特に町屋の東部にある原に続く荒木田原（三河島村現町屋七丁目）、東叡山寛永寺の芝地だつたところですが、ここから採れる土が良質であつたため、ブランド名となり荒木田土の名称で呼ばれたらしいのです。恐らくは、荒木田土＝真土であり、町屋も真土が採れる原、真土が広がる原との意味があつたのではないかでしようか。

町屋：それは大胆なお話ですね、なんだかこそばゆい感じがいたします。

某：いやいや、『町屋の民俗』（平成5年発行）という本の受け売りですよ。

町屋：ところで、ここ町屋文化センタ

いたことがありますよ。小塚原町名主のご親戚の加藤雀庵さん、この方大変探求心の強いお方で、調べたことをいろいろと書き留めていらした。その一つ、『ちりづか』（四十四武藏鑑）に、昔この辺りでは、野を「や」と呼んだ、と記していらっしゃる。そうすると、町屋のやは、野の意味と考えられませんか。「まち」は「まつち（真土）」が音便化したもので、つまり「マツチヤマ」→「マッチャヤ→マチヤ」となつた、下町の人人が、台東区の真土山を「マッチャマ」と呼んでいるみたいに。

町屋のやは、野の意味と考えられませんか。「まち」は「まつち（真土）」が音便化したもので、つまり「マツチヤマ」→「マッチャヤ→マチヤ」となつた、下町の人人が、台東区の真土山を「マッチャマ」と呼んでいるみたいに。

町屋：それはそうですね。私たち一族みんな反対したんだが、お上には逆らえず…。しかし、皮肉なのですね。昭和7年の区制導入で、また町屋は離別し、なんと昭和44年ころまでに三河島さんは「荒川」に改名することになつたのですから。なぜ改名したかって？ それは、三河島さんに聞いてください。それぞれの理由があつて、案外今の名前が気に入つているかもしませんよ。

〔野尻かおる〕

地域史研究の強い味方 『三河島郷土史』(復刻版)出来！

この度、「文化館*ブックス」第1弾として同書が発行されました。昭和7年の刊行で、入手困難な本です。戦前の自治体史ながら、三河島町（現在の荒川・町屋地区）にほぼ相当）の歴史や地名・伝承などが詳しく紹介されています。現在では確認できない古文書・板碑等を多く収載していることも特徴で、資料的な価値の高さでも評価されています。880円。

お問合せは荒川ふるさと文化館

小学校のお引越し《外伝》

～郷土資料室を引っ越そ～

皆さん、郷土資料室といわれる教室のある小学校が、荒川区内にあることを存知ですか？

ひょっとしたら、以前通っていた小学校にそんな教室があつたことを覚えておられる方もいらっしゃるのではないか。そこには、学校の周辺に住む人達から寄贈された、昔の生活用具や写真など、貴重な資料が収められています。自分達の通う学校で、学校と地域の歴史や生活を実物によって学べるのが、まさに「郷土資料室」の特長であるといえます。

南千住八丁目の第五瑞光小学校には「汐入生活文化資料室」と名づけられた郷土資料室があります。平成4年、当時の校長先生が、変わりつつある地域の生活の歴史を残そうと資料を集め、空き教室を利用して展示したのが始まりでした。この地域は、かつて汐入と呼ばれ、江戸時代から続々農村集落の面影を残しつつ、独特の町並みを形成していましたところでした。集められた資料には「胡粉」作りで使用されていた臼臼をはじめとする汐入地域ならでは、というような道具や、農具、家具、衣服から映画のパンフレットまで、総数にしてざつと手近近くの、ありとあらゆるものがあります。

現在、汐入は、大規模な再開発が進められ、小学校も平成4年以来休校となつて第四瑞光小学校とともに新築移転となり、今年4月から「汐入小学校」として生れ変わります。そして、新校舎には新しい郷土資料室が作られることになりました。資料室の移転の話が文化館に来たのは去年の5月。以前から目録の作成の為に前任の専門員が何度も小学校に通つましたが、高速、移転に先立ち、目録の完成を目指すことにしました。主に担当したのは前任を引き継いだ文化館の専門員筆者と、元PTA会長で古くから汐入に住む家のご主人でもあられるT氏の二人でした。実は、当時

お買いもの① 「箕輪御下屋敷」

当館には、時々古書店から目録が送られてくる。区に関わる資料はないものか、と期待しながら目録をめくるのも専門員の仕事である（と思っている）。

そんな古書目録のひとつに「箕輪屋敷の図」という絵図が載っていた。図版から、「箕輪御下屋敷」という文字といくつ

かの年次、建造物等の配置が見えた。これだけでは区に関係するとは言えない。だ

が、目録で見つけ次第、古書店に電話を

し、品物を押さえてもらうことにしてい

る。古書店側の所見を聞くことはもちろん

だが、この「押さえる」という点が、なに

より大切なことがある。なぜなら、この段階

では「商品」であり、要は早い者勝ちだか

らである。実際買い損ねた資料も過去には

多々あった。事実この絵図も当館のすぐ後

に申し込みが入ったらしい。当面、こちら

の優先となつたが、向こうも商売である。

返答は急がなくてはならなかつた。かとい

つて、区と無関係の資料を買うわけにもい

かない。かくて、仕事は資料の検討・史料

批判へと移るのである。

絵図は郵送されてきた（この辺の判断は

古書店側にあり、写真が送られてくる場合

もある）。実物からや目録からは判読でき

なかつた文字も読めたが、区の関係資料で

あるとするには、今ひとつ確証に欠けてい

た。そもそも当初の判断は、「ミノワ」と

いう地名があることと、そこに下屋敷があ

る、という点からの推測のみだった。現在

区域には、かつていくつかの武家屋敷があ

り、特に二ノ輪（南千住一丁目）には、数

家の大名屋敷が隣接して存在した。例え

ば、大閥横丁という地名は、下野黒羽藩大閥家の下屋敷・抱屋敷に、またかつてあつた字加藤という地名は、伊予新谷藩育委員会による史跡説明板でようやくその存在を知ることができる程度である。区割りは若干残っているが、近世の屋敷地一般には屋敷図がない限り分からないのである。

さて、実物の絵図から読み取れたのは次の棒内の事柄だつた。

①延享2年作成の絵図を文化3年に写したもの。

②写した所以は、寛延3年にあつた火災前の状況を伝えるため。

③その出火原因是花火の余火。

④表座敷や奥、藩士の長屋のほか、鎮守の稻荷や炭・味噌・米などの蔵や庭園がある。

⑤屋敷南側に表門と裏門がある。

⑥家老以下、総勢22名の藩士の名がみえ、「求馬様御部屋」もある。

⑦や⑧は区に関係なくとも興味深いが、早急に資料を読みとる必要があったので、

⑨に着目した。切絵図などから⑨に該当すると思われる二ノ輪の下屋敷は、宗・大

関・加藤・石川の4家だつた。そこで、これら当面の候補をむやみに色々な事典で引いてみた。が、まったく行き当たらず、嫌になつて⑩の「求馬様」に目を移つた。

写真が一枚あつた。付箋にある表・裏門の位置、庭園の位置、藩士の名と絵図の名も一致していた。

決定である。そういえば、「創垂可繼」という黒羽藩の記録に、下屋敷にあるとする稻荷の初午の祭に関する記事があつたことを思い出した。ともあれ晴れて囲み枠のこと

とが新たに「分かった」ことになつた。

すぐさま子細を担当の事務職員に伝え、古書店と売買契約を結び、「商品」は資料となつた。時期を得て皆様のお目に掛かる日もくるだろう。とりあえず専門員は、(4)

の稻荷でも探しに行こうと思った（帰りに

と思われる建物に比して詳細だった。加えて、この絵図には寛延3年のデータが書き込まれてることになつていて、このことによく気付き、「寛政重修諸家譜」が頭に浮かんだ。寛政年間に編さんされ、文化9年に完成したもので、大名、旗本など、御目見以上の士の系図・由緒・事跡に並んで、

氏・名・諱・官名なども記されている。さ

らにありがたいことに、続群書類從完成会版には索引があり、「求馬」を引くと、「求馬

介・助・之助」は全397名いた。が、検索すべきは先の4家。すると、没年から大閥家の藩主増興の弟・増満に限定された。生年は定かではないが、増興が宝永6年生まれだから、該当者の可能性は十分である。だが、これでもこの絵図が区に関するもの、というには心もとない。

と、ここまで見て、いつしょに見ていた専門員が、そういう昔撮影した「大閥家文書」（黒羽町所蔵）に下屋敷の絵図があつた、といいだした。平成9年8月、当館開設準備のための資料調査の際、時の文化財調査員（現文化財専門員）が撮影し

てきたものである。早速アルバムを探し出し

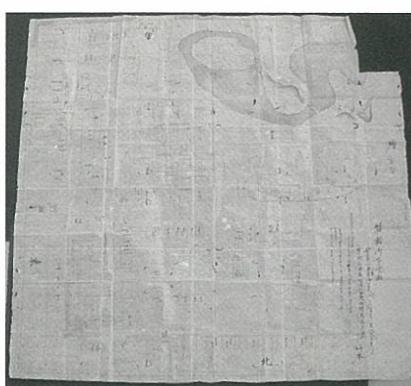
しめくつたところ、建物などを付箋で示す

写真が一枚あつた。付箋にある表・裏門の名も一致していた。

現地をふらふらしてみたが、適当なものは見当たらなかつた。ご存じの方がいらした

らご一報ください。（亀川泰照）

※地紋は大閥家の家紋



箕輪御下屋敷

